

## 人間総合科学研究科の運営方針

後藤勝年

人間総合科学研究科長

### 研究科の概要

人間総合科学研究科は、医学系、体育・芸術系、人間系（教育・心理・心身障害）の3領域が、人間の諸問題に対する総合的な教育と研究を推進することを目的として設立された研究科である。既存の11専攻に、これら3領域の連携により創設された「スポーツ医学」、「感性認知脳科学」、「ヒューマンケア科学」の3種類の新しい融合領域専攻が加わり、全部で14専攻よりなっている。しかし、これはあくまで大学院博士課程の研究科のことであり、部局としての研究科となると、いささか事情が異なる。部局を構成する全教員数は640名に及ぶ巨大な研究科であるが、約40%の教員は上記の専攻を担当していないからである。これは、後程少し詳しく触れることとするが、これら組織の学群教育は臨床・スポーツ・芸術・教育・福祉等の領域におけるスペシャリストを養成することを主たる目的としている

ことと無縁ではない。この問題に如何に対処するかは、本研究科の重要な課題の一つである。

### 副研究科長と学系長の役割

医学系地区、体・芸系地区、人間系地区はそれぞれ、筑波大学の区割りでいえば西地区、南地区、中地区の広大なキャンパスの離れたところに位置している。更に、平成16年度になって総合研究棟Dが完成し（南地区の天久保池のほとり）、新設3専攻の教員はほぼ全員がD棟に入居した。人間系は100名足らずであるが、体・芸系と医学系は他の大研究科と同等かそれよりも大きな組織である。それぞれの領域には他とは異なる伝統と文化があり、独自の目標と課題を掲げている。従って、研究科長が一人で統括するのは物理的にも不可能であり、それぞれの領域の事情に精通した副研究科長の裁量に頼らざるを得ない。事実、本研

究科の3人の副研究科長は大変な重責を果たしており、それに相応しい形に authorize することは焦眉の急である。又、体育と芸術および医学は単一の専攻に収まる教員数ではなく、複数の専攻に跨がることになる。例えば、臨床医学だけで3専攻に別れているが、それぞれの専攻が独自に運営を始めたら、医学の学問体系・臨床体系が崩壊してしまうのは自明の理であり、他も同様の事情である。大学の基本方針といささか異なっているようであるが、先の専攻を担当していない教員の問題も含め、結局は従来のように学系長を中心として組織をまとめるのが最も理に適っており、そうせざるを得ないのが現状である。新設3専攻は融合領域を着実に発展させるという至上の任務を課せられているが、D棟という隔離されたところに位置しており、上記と同様の理由で各学系長との密接な連携が不可欠である。

D棟の新設3専攻教員の事務は全て体・芸支援室で取り扱うこととなり、医学系も看護・医療科学類が加わって、それぞれの支援室の事務は益々煩雑・膨大となってきた。現在10名以上の非常勤職員を採用して急場を凌いでいるが、これも早急に対処しなければならない難問である。

## 教育・研究面での課題

本学はA級の研究大学(大学院大学)を標榜しているからには、超一流の研究成果を世界に向けて発進していかなければならない。これは全ての教員に該当するものではなく、世界最先端の研究を展開している教員に期待されることである。このようなチャンスに巡り合えた教員が最大限力を発揮できるような環境を整えることが肝要である。しかし、これに該当する教員はごく少数であり、全般的には未だ不十分の感も否めなく、更なるレベルアップを望みたい。

大きな社会問題となってきた生活習慣病、新興感染症や難病の治療に向けた先端的研究、病気にならないための健康科学や効率的トレーニングを目指したスポーツ科学の研究、激射や攻撃、複雑化した社会環境における不健全な生活習慣の獲得と、それに起因する精神・神経疾患、孤立化、不適應などに対する適切な研究などは喫緊の課題である。これらは社会貢献に直結する問題で、解決に当たっては学際的取り組みが大きく功を奏しよう。この意味でも新設3専攻の役割は重大である。そして、将来このような研究を推進する能力を秘めた研究者を育成することも、本研究科の重要な命題の一つである。

本研究科の学群教育の主たる目的の一つがスペシャリスト又はその指導者の育成で

あることは上述の通りであるが、これに拘泥しすぎると柔軟性にかかる側面が浮かび上がってくる。医学系以外の組織では、東京教育大学時代から何十年もの間に蓄積されてきた輝かしい伝統と実績を誇り、文字通り教育やスポーツの牽引車となって日本をリードし、大きな社会貢献をしてきたことに異論はない。しかし、これからはスペシャリストの育成のみに甘んじてはならない状況になりつつあり、臨床の技やスポーツの試合の成績、芸術的作品、教育・福祉等々だけで評価される時代は過ぎ去ろうとしている。何故ならば、心臓病や精神疾患等に特化した公立・私立病院では、質的にも量的にも大学病院も及ばない規模で診療・治療が行われており、街の道場や民間のスポーツクラブ、スイミングクラブではオリンピック選手を多数輩出するような優れた指導が行われている。アトリエや工房を有する巷の専門家は独特の芸術作品を作製し、一般の大学教育学部や私立の福祉関係学部では教員養成や特殊教育が派々と続けられている。人間総合科学研究科の教員に今求められていることは、これら巷間の専門家とどのように違うかを示すことである。伝統的にはそれなりの実技と理論が調和し、輝かしい実績に結びついてきたことは事実であり、修士レベルでの教育・研究は極めて充実している。しかし、これか

らの大学に望まれることは、更なる上を目指し、やはりしっかりと科学的理論に裏付けされた高度な教育・研究を展開することであろう。幸いにも、本研究科では現実に即した実技の適切な指導が行われてきており、それぞれの専門領域で先端的な科学研究も進展してきている。今後は両者が密接に連携してアカデミズムに光輝く教育・研究体制を整え、新しい日本のリーダーに衣替えることが期待されるものである。これは学位取得の有無とは必ずしも整合するものではないし、それに結びつけて論ずる問題でもない。しかし将来的には、学位は個々のステータスを象徴するものとして客観的に評価されるIDカードの一種と捉えるのが妥当ではなかろうか。

### 研究科の組織について

本研究科は医学系、体・芸系、人間系の3領域が結集した巨大な組織で、それぞれが独自の事情を抱えており、無理に統合しただけでは単なる烏合の衆になりかねない。各領域ではそれぞれの伝統と文化に即した教育・研究が行われてきており、多少向いている方向が違っていてもそれらが最大限生かされるように、特色ある高度な大学院を育んでいくことが重要で、画一化する必要は全くないことを、まず強調しておきたい。個々の特徴を尊重したうえで、異った

領域の代表者達が運営委員会などで忌憚らない意見を交わしている間に、他の領域の文化も徐々に理解できていくものであり、その兆候は至るところで垣間見られるようになってきた。人間の諸問題は心的側面、身体的側面、環境的側面の分離的な教育・研究が行われてきたが、これらが融合した統合的教育・研究も一段と重要になってきた。しかし、あまり無理はせず、とりあえず学際領域研究のできるのところから始めるのが妥当である。新設3専攻はこれが具体的に実現したものであり、スポーツ医学と感性認知脳科学の2専攻はそれぞれ「21世紀COEプログラム」が採択されており、求心性の高まっていることは心強い限りである。異った領域の連携によるプロジェクト研究も積極的に組まれるようになり、今後は学際的研究が益々多くなってくものと予想される。このような取り組みは競争的  
外部資金の獲得にもつながり易く、大いに推奨される。

本研究科における当面の重要な問題として、独立修士研究科（医科学、体育、芸術、教育の4研究科）を如何に処遇するかということがある。中期目標・中期計画には、各修士研究科を人間総合科学研究科に組み入れる内容のことが謳われており、早晩取り組まなければならない問題である。医科学、体育、芸術の3研究科では計画がかなり

具体的に進みつつあるが、教育研究科は構成員が複数の大研究科にまたがっており、難航することも予想される。

おわりに

人間総合科学研究科が「烏合の衆」になりかねないという懸念が消えたわけではないが、事態は比較的順調に推移している。糸の切れたタコのようにあらゆる方向へ飛んでいくような集団を出さないようにすることも、研究科長の重要な役割の一つかも知れない。本研究科は広大なキャンパスの3カ所（D棟を含めると4カ所）に分散しているので不便なことも多い。特に支援室の混乱は未だ顕在化しており、大きな懸念材料の一つである。いずれにしても、様々な問題に真摯な態度で対処し、本研究科の教職員や学生も含めた全構成員が生き生きと教育・研究に取り組めるような組織にしていかなければならないと考えている。

（ごとう かつとし／分子情報・生体制御医学）